

多紀元堅「傷寒論述義」原文と訓読

卷第一叙述

傷寒論述義題辭まえばき

從來注傷寒家、概是想象懸擬、各師私見、竟無定論、於是先教諭洽搜諸家、衡別是非、著有輯義一書、仍惜繕次僅就、閒欠細辨、元堅童時嘗受講授、柰質鈍不能詳記、及至弱冠、日取輯義讀之、每遇疑竇、念趨庭之無期、未嘗不為之歔歔嗚咽也、遂乃遵奉遺訓、就至平易之處、涵泳玩繹者、蓋亦有年矣、以為前輩有類證、有類治、有類方、未有求病情病機、能加剖判者、故微言大義、往往湮鬱而不明焉、仍不自揣、疏其要、通其異、述為五卷、以擴充輯義之餘意、陰陽之略、兼變之殊、參互攷究、具為條析、而更設答問數則、以辨其大例、附之卷末、竊恐猶是不過於想象懸擬已、然言必審徵體驗之、諸無稽之說、斷斷乎所不屑為、則較之浮辭高談、急于誇張者、或切于日用之際、歟、因憶先友有軒邨寧熙字世緝者、才敏苦學、深用力此經、多所濬發、亦有志注解、約相與商榷、且序其書、今拙著卸稟、其人已謝、惋歎之餘、遂併書此、

文政丁亥嘉平月丹波元堅纂

從來傷寒に注詳しく説き明かすする家学者、概して是想象想像懸かけ擬おしはかる、各私見自己の考えを師とし、竟ついに定論定説無し、是に於いて先の教諭おしえとを洽あまねく諸家に搜さがし、是非を衡かたよらず別わかる、著書著書輯義多紀元簡「傷寒論輯義」一書書物有り、仍なお惜いと繕おぎなう次ところ僅僅就できあがる、閒間に細辨を欠く、元堅童時幼少の頃嘗て講授ときあかしさずけるを受ける、柰奈・如何如何質鈍質鈍詳しく記するす能わず、弱冠二十歳に至るに及び、日毎日に輯義を取りて之を讀む、疑竇穴に遇あう毎毎に、趨庭スウテイ・子子が父父の教教えを受受ける諭えの期期*無無きを念おもう、未だ嘗て之が為為に歔歔すすり泣く嗚咽オエツせざるなき也、遂に乃ち遺訓ジュンポウを遵奉従い守る、至平極めて公平至易極めて容易の處處に就行く、涵泳恩恵にあずかること・ひたり泳ぐ玩繹意味を調べ味わうには、蓋し亦年有多多し矣、以為おもへらくに前輩先輩類證類證有り、類治類治有り、類方類方有るも、未だ病情病機病情病機を求め、能く剖判物がわかれるを加加える者者あらず、故に微言微妙な言葉大義大きな筋道、往往湮鬱インウツ・氣氣がふさいで晴晴れ晴れしないにして明明らかならず焉、仍したがって自ら揣おしはからず、其要其要を疏ととのえ、其異ことなるを通通し、述述べて五卷と為為す、以て輯義輯義の餘意言外に含む意味を擴充拡大して充実さす、陰陽陰陽の略あらまし、兼變ことなるの殊ことなる、參互まじえしらべる攷究考えきわめる、具具つつぶぶさに條析条理を立てて区分するを為為して、更更に答問數則答問數則を設設け、以て其大例立派な権威ある規則を辨あきらかにするじ、之を卷末卷末に附附ける、竊ひそかに猶是想象懸かけ擬おしはかるに過過ぎざるを恐恐れる已已のみ、然れども言言必必ず體験つまびらかに之之を審審み、諸稽かんがえ無無しの説説、斷斷乎断定的為まなぶぶを屑いさぎよからずの所所なれば、則ち之之を浮辭確實でない言葉・虚飾高談声高い話、誇張誇張に急急ぐ者者に較くらべず、或いは日用日用之際際を切切る歟、因りて憶憶うに先友父の友軒邨寧熙字世緝*者者有り、才敏苦學才敏苦學、深深く力つとめて此經傷寒論を用用い、濬發シュンパツ・深深く發發すこと多し、亦注解亦注解に志志有り、相與ともにに商榷ショウカク・はかりさだめる、且つ其書其書を序序するを約誓うす、今拙つたない著書著作稟稟を卸おろすに、其人其人已已に謝死ぬす、惋歎ワンタン・悲悲しみ嘆くの餘あまり、遂に併併せて此此を書書く、

文政丁亥ひのとい・文政十年(1827) 嘉平月丹波元堅纂撰・著作

則至眞要大論^{七十四}云「岐伯曰、審察病機、無失氣宜、帝曰、願聞病機何如、岐伯曰、諸風掉^{トウ・ふるふる}眩、皆屬於肝・・・」立之案ずるに、凡そ病の發動する所、之を病機と謂う、即ち以て故^理を候^うか^がう所と爲す、又之を病候と謂う、巢氏「諸病源候論」の名蓋し此言より採る、既に病源を察知、又其病が發動する所の機変^{からくり}を得るを候^まち、後ち始めて施治すべき也、菑庭^{多紀元聖}先生「邪之進退消長、勢之緩急劇易、皆謂之機也、」と曰う 是亦病機之一端已^{のみ}、以て余之を觀れば、則ち「諸風掉眩」と云う所、是病機也、「皆屬於肝」是病源也、譬^{たと}え^るに風寒邪氣、是病源、其頭痛項強惡寒發熱を爲すは、是病機也、此の如く之を解せば、則ち通ぜざる所無し矣

○醫心方引作先候病機、與證類合、

醫心方引いて「先候病機」と作^なす、證類^{「經史證類大觀本草」}と合^う、

所^レ謂治者、何也、汗下涼温、及刺灸之法、是也、六病之中、自有^レ緩急劇易之不^レ等、故方亦有^レ大小緊慢之不^レ同、以相對治、加^レ之人不^レ能^レ無^レ宿恙相得^レ、醫或誤措、以致^レ變逆^レ者、凡皆隨^レ其脈證^レ、而備^レ之治法^レ、其深切而著明、平易而直達、固既如^レ是、始非^レ有^レ艱隱難^レ知者^レ也、雖^レ然、其書實三代之遺、是以言高而旨邃、苟不^レ通^レ其義例^レ、則未^レ免^レ乎盲者之擿^レ埴、索^レ塗冥行而已矣、蓋嘗論^レ之、取^レ之岐扁^レ、變而通^レ之、此名稱之例也、自^レ熱而寒、自^レ表而裏、自^レ實而虛、此篇第之例也、六病各有^レ提綱^レ、而次以^レ細目^レ、又次以^レ本病來路、傳變證候、及誤逆諸態、疑似各病^レ、或舉^レ其正^レ、而承以^レ其奇^レ、或說^レ其輕^レ、而續以^レ其重^レ、有^レ法有^レ案、有^レ戒有^レ論、參互錯綜、縷分條析、此章次之例也、語有^レ主客^レ、辭有^レ詳略^レ、或數條相參、而其義始悉、或一章之中、文互照對、證以^レ方省、方以^レ證略、有^レ下理趣明白、不^レ假^レ複述^レ者^上、有^レ下事緒緜雜、須^レ人引伸^レ者^上、此辭句之例也、四者之例、極爲^レ謹嚴^レ、而俱是莫^レ不^レ深意所^レ存矣、今不^レ憚^レ弁陋^レ、本^レ于輯義之著^レ、校^レ諸四者之例^レ、推^レ究病之情機^レ、以述^レ其大要^レ、始^レ陰陽總述^レ、終^レ差後勞復^レ、脈證治法、具爲^レ辨析^レ、顧猶未^レ免^レ注家^レ戛定之氣習^レ、然不^レ分^レ其派^レ、無^レ由^レ以達^レ其源^レ、不^レ疏^レ其類^レ、無^レ由^レ以認^レ其別^レ、故務去^レ拘鑿之談^レ、敢從^レ坦明之說^レ、庶通^レ其可^レ通、疑^レ其可^レ疑、耑以括^レ充家庭之遺教^レ、闡^レ揚性命上之神理^レ矣、後之讀者、或由^レ此入^レ手、其於^レ臨^レ病處^レ療之方^レ、未^レ必無^レ小補^レ云、

謂う所の治とは、何也か、汗下涼温、及び刺灸の法、是也、六病の中、自ら緩急劇易の等しからざる有り、故に方亦大小緊慢の同じからざる有り、以て相對治す、之に加えるに人は宿^{以前からの}恙^{ヨウ・病氣}相得る無き能わず、醫或いは誤った措^{措置}、以^{それでも}つて變逆を致す者には、凡そ皆其脈證に隨^{したが}いて、之に備^備える治法、其深切^{適切}にして著明^{著しく}明らか、平易にして直達、固く既に是の如し、始めるに艱^難隱知り難きものに有るに非ざる也、然りと雖も、其書實に三代^{夏・殷・周}の遺^{のちに}残したるもの、是以て言高^{高尚}にして旨^趣旨^旨邃^邃・なしとげる、苟^{かり}そめにも其義例^{書籍の凡例・一般原則}に通ぜざれば、則ち未だ盲者^{テキシヨク・盲人が地をたたきながら道を行く}擿^{道路}を索^{もとめ}冥行^{くらやみをいく・理を知らないで行う}を免れざる而已^{のみ}矣、蓋し嘗て之を論ずるに、之を岐^岐扁^扁に取り、變えて之を通^{とお}す、此名稱の例也、熱自^{より}して寒、表自^りして裏、實自^りして虚、此篇第^{順序}の例也、六病各提綱^{ことの主要な点}有りて、次に細目を以てす、又次に本病來路、傳變證候、及び誤逆諸態、疑似各病を以てす、或いは其正を擧げて、承^うけるに其奇を以て

す、或いは其輕を説きて、續いて其重を以てす、法有り案有り、戒有り論有り、參互まじえしらべる錯綜入り交へ集まる、縷ル・こまかい分條析条理をたてて区分する、此章の次の例也、語に主客有り、辭に詳略有り、或いは數條相參くらべあわせるして、其義始めて悉シツ・細かく知り尽くす、或いは一章の中、文互いに照らし對あう、證が方を以て省かれ、方が證を以て略される、理趣道理明白、複かさねる述を假からざる者有り、事緒いとぐち懸懸雜、須く人引伸応用すべき者有り、此の辭句の例也、四者本病來路、傳變證候、誤逆諸態、疑似各病の例、極めて謹嚴つつしみふかくおごそかなことを為して、俱是深意存する所あらざるなし矣、今夤エン・せまい陋ロウ・見識がせまいを憚はばからず、輯義の著著書を本元本元に、諸四者の例を校案じ、病の情機を推究し、以て其大要を述べる、陰陽総述に始まり、差後勞復に終わる、脈證治法、具つぶさに辨析理非を分かちきめるを為す、顧かえりみるに猶未だ注家の更更正改正の氣習氣質と習慣を免れず、然れども其派を分けざれば、以て其源に達する由無し、其類を疏とおさざれば、以て其別を認める由無し、故に務めて鑿コウ・こじつけに拘こだわる談を去り、敢えて担明の説に従う、庶こいねがわくば其通ずべきを通じ、其疑うべきを疑う、崑専ら以て家庭家門の遺教を拡充、性命天から命ぜられた持ちまえ上の神理靈妙神奥な道理を闡揚センメイ・明らかにするにす矣、後の讀者、或いは此に由より入手、其病に臨んで療に處するの方に於いて、未だ必ずしも小補少しの補い無しとはせずと云爾云・しか云う、

是書之作、以レ 辨全經大義 為レ 主、故每病每證、不二 必具一 列各章、特舉其梗概、以俟人隅反、蓋叙大綱、則用大書、而其所以為 説、及援拋諸説、則夾注其下、要旨不レ 過於述 輯義之餘意、則輯義既載者、亦不レ 復録出、如撰述之例、更有 三端、一發輯義之覆、輯義固主慎重、故於情機傳變之委、前人説不レ 具者、大抵缺而不レ 論、今鑽研經旨、覈核事理、略加辨訂、以為貂續、一酌諸家之中、輯義所引 諸説、或一條而異同兼臚、或數條而前後異其義、今則參互涵泳、歸之於畫一、一補輯義之遺、前輩確説、及諸家擴充經旨 者、或有漏落、略取附之、唯拙著別有傷寒廣要、故彼之所採入、茲不レ 復贅、要之 仲景之書、理無レ 不レ 該、學者如飲 河之鼠、各充其量、此輯義之著、亦所以 不レ 厭廣蒐、今斯書、則僅述一隅、所見 特隘、然既博矣、從而約之、固亦為學 之方、覽者幸恕潛越之罪 而可也、

是書の作つくり、全經の大義經書の要義・大切な筋道を辨明らかにするを以て主と為す、故に病毎に證毎に、必ずしも各章を具つぶさに列ならべるせず、特に其梗概あらましを擧げ、以て人の隅反物に四隅あり、一隅を挙げて三隅を知る喩え・類推の意に俟まつ、蓋し大綱根本を叙のべ、則ち大書大きな字を用いて、以て其説を為す所、及とともに援根拠拋根拠の諸説は、則ち注を其下括弧外に夾む、要旨は輯義多紀元簡「傷寒論輯義」の餘意言外にふくむ意味を述べるに過ぎざれば、則ち輯義既載者、亦復かさねて録出せず、撰述センジュツ・書を著すの例の如き、更更に三端端緒・いとぐち有り、一は輯義の覆反を發はなつ、輯義固く慎重を主とす、故に情機傳變の委委細に於いて、前人説に具えざる者、大抵缺して論せず、今經旨を鑽研鑽、事理を覈しらべ核きわめ、略ほば辨別区別訂誤りを正すを加え、以て貂續統紹・ソクチヨウ・立派なものあとに粗悪なものが続くを為す、一に諸家の中を酌くみとるし、輯義引く所の諸説、或いは一條にして異同不一致兼臚附、或いは數條にして前後其義を異にする、今則ち參互まじえしらべ

る涵泳^{カンエイ・遊泳}、之を畫^一確定に帰す、一に輯義の遺^{おとす}を補う、前輩^{先覺}確説、及び諸家で經旨を擴充する者、或いは漏落有り、略取して之を附^つける、唯拙著別に「傷寒廣要」有り、故に彼の採入する所、茲^{ここ}に復た贅^{あつめる}せず、之を要すると仲景の書、理^{道理}に該せざる無し、學者河^{大河}を飲む鼠の如き、各其量を充^みたす、此輯義の著、亦広く蒐^{あつめる}を厭^{いと}わざる所以、今斯^この書、則ち僅か一隅を述べ、見る所特に隘^{せまい}、然れども既に博^{ひろ}い矣、従つて之を約^{しめ}くるす、固^堅きこと亦學を為すの方^道、覽^{みる}る者幸^{こいねがう}潜越の罪を恕^{ゆる}るすべし也、

○校諸注家、如^一尤怡傷寒論貫珠集、黃元御傷寒懸解、長沙藥解^一、俱出^一于先教諭下^レ世之後^一、尤書穩實、閒有^一發明^一、黃書僻謬、殊少^レ可^レ取、又近世有^一熊壽試集注^一、又郭雍傷寒補^亡論、輯義從^一汪氏^一轉引、而近日有^一吳柏新齋本^一、今亦採入、至^レ如^一皇國注家^一、則指不^レ暇^レ僂、輯義一概不^レ引、嫌^一蕪雜^一也、愚亦甚厭^レ讀、姑取^一一二部^一、略摘^一錄之^一已、

○校案ずるに諸注家、尤怡「傷寒論貫珠集」、黃元御「傷寒懸解」「長沙藥解」の如き、俱に先の教諭^{おしえ}と世に下る後に出る、尤の書穩^穩實、閒間に發明^{明らか}にする有り、黃の書僻^かたより謬^誤、殊^{こと}に取るべきは少ない、又近世に熊壽試集注に有り、又郭雍「傷寒補^亡論」、輯義は汪氏に従い轉引す、しかして近日吳柏新齋本有り、今亦採入、皇國注家の如きに至つては、則ち指して僂^かがむに暇なし、輯義一概^{全く}引かず、蕪雜^{みだれて順序が立たない}を嫌う也、愚^私亦甚だ讀むを厭^{いと}う、姑^{とり}あえず一二部を取る、略^{少し}之を摘録する已^{のみ}、

○郭氏曰、問云、傷寒何以謂^一之卒病^一、雍云、無^一是說^一也、仲景叙論云、為^一傷寒雜病論合十六卷^一、而標^一其目^一者、誤書為^一卒病^一、後學因^レ之、乃謂六七日生^レ死人^一、故謂^一之卒病^一、此說非也、古之傳^レ書怠墮者、因^一於字畫多^一、省^一偏旁^一書^レ字、或合^一二字^一為^レ一、故書^レ雜為^レ菜、或再省為^レ卒、今書^一卒病^一、則雜病字也、漢劉向校^一中秘書^一、有^一以趙為^レ肖以^レ齊以^レ立之說^一、皆從^一省文^一、而至^一於此^一、與^一雜病之書^一卒病^一無^一以異^一、今存^一傷寒論十卷^一、雜病論^亡矣、郭此說甚是、但末句有^レ礙、

○郭氏^{郭雍「傷寒補^亡論」}宋曰く*、問云、傷寒何にも以つてか之を卒病と謂う、雍云、是說無き也、仲景叙論^{序文}に、傷寒雜病論合十六卷と為すと云う、しかして其目^{題目}を標^めじるとする者、誤書^{誤写}して卒病と為す、後學^{後の學者}之に因^よる、乃ち六七日を人の生死、故に之を卒病と謂う、此說非ざる也、古の書を傳えるに怠^{怠惰}墮^{怠惰}者、字畫多に因り、偏旁^{左へん・右つくり}を省き字を書く、或いは二字を合わせて一と為す、故に雜を書くに菜と為す、或いは再び省き卒と為す、今卒病と書くは、則ち雜病の字也、漢の劉向が中秘書^{宮中の藏書}を校^{しら}べるとして、趙を以て肖と為し齊を以て立と為すの說有り、皆省文に従よりて誤り此に至る、雜病の書と卒病は以つて異ならず、今傷寒論十卷存す、雜病論^亡矣、郭の此說甚だ是、但末句に礙^{ガイ・さまた}げ有り、

*「傷寒論攷注」序 傷寒卒病論集にいて。案卒集二字恐雜之壞訛成二字者・・此說甚是、然至集字無辨、今雜字或作棟則分為二字之愚案為允當、

案ずるに「卒集」二字恐らく雜の壞^{くず}れ訛^誤りて二字と成る者・・此の說甚だ是、然れども「集」字に至りては辨無

し、今「雜」字或いは襍雑の本字と作れば則ち分かちて二字と為るとの愚案私の考え允當イントウ・道理に合うと為す、

○家丹州公醫心方、引「養生要集」、有「高平王熙叔和曰語」、拠此、叔和名熙、以「字行也」、先友山本謙嘗有「此説」、實為「前人之所」未「言及」、仍附「拈之」、

○*家丹州公わが家の先祖の丹波康頼の醫心方に、養生要集を引き、高平王熙叔和曰くの語有り、此に拠れば、王叔和の名は熙、字の叔和を以て行ひろまる也、先友山本謙嘗て此説有り、實に前人の未だ言及せざる所と為す、仍なお附して之を拈記す、

*以下の読みと注は小曾戸洋先生私信でお教えいただいた。

王叔和の姓名については所説あるが、医心方卷二十九所引の「養生要集」には「高平王熙叔和・・・」と記された部分が二箇所あり、「千金方」卷二十六所引の「養生要集」には「高平王熙称・・・」と見える。したがって多紀元胤「医籍考」は「千金方」の記載から「叔和名熙以字行也」すなわち王は姓、熙は名、叔和は字あざなであるといい、山田業広「医事小言補正」も「千金方」「医心方」の記載を根拠として「王叔ハ複姓ニアラズ」と論じている。

小曾戸洋「中国医学古典と日本」331頁注

完 2009/03/31
訂正 2009/08/31
追加 2009/10/06